



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticano の転載許可
© 1991
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

レオ13世の社会教説 レールム・ノヴァルム 百周年講話

改善は見られるが、
まだ緊張関係が残っている

✠ (…19世紀の終りに教皇レオ13世は、教会と全世界に向けて回勅『レールム・ノヴァルム』を発表されました。今年、5月15日、回勅発布百周年を祝います。当時、人々が政治面での変化だけでなく、社会面での変化を強く望んでいたことを教皇はよく御存じでした。「ひとたび、諸国民の間に、革新熱が広がった今、それは政治の領域から、その隣の経済の領域にうつるにちがいない、と予想されていた」と教皇レオ13世は書いておられます。一世紀が経った今、労働者の世界は大いに改善されたように見えます。しかし、まだまだ緊張と衝突の原因となる事柄が、場合によっては以前より重大な事柄が残っています。

キリスト教二千年を終えるにあたり、(…)本当の改革への望みはキリストの福音を基礎にすべきであると私は確信しています。(教皇レオ13世の言葉を讀んでみましょう。)

「とこのえねばならない第一の条件は、キリスト教的道徳の復興であることをみなが思い起すべきである。この道徳を除外するならば、人間の知恵がもっとも有効な手段として勧めるものも、有益な効果を生ずることができないにちがいない。(90・12・2)『レールム・ノヴァルム』の訳は、岳野慶作訳(中央出版社)を参考にさせていただきます。」

誰もが正義を履行しなければならぬ

洗礼者ヨハネは人々にイエズスを示し、世の罪を背負うたため、人々を悪から解放するために来

られた「神の小羊」として紹介します。(ヨハネ1・29参照)

ヨハネは「洗礼を受けようとして来た人々」に、民族や宗教上の特権に訴えるのではなく、「われわれの父にアブラハムがいる」、「悔い改めにふさわしい」行いを示すことによって、「近く来る神の怒り」から逃れよ、と教えました。(ルカ3・8参照)

洗礼者は皆に、「二枚の上着を持つ者は、持たぬ者に分けよ。食物を持つ者も同じようにせよ」と教えました。(ルカ3・10) これは、食物を分け合え、生きる権利は食物に優先する、という福音の教えの先取です。税金の取り立てを仕事としており、公職についていた人々の代表といえる収税吏の質問に対しては、「決った以外のものを何一つ要求するな」と答えました。(ルカ3・13) すなわち、正義の要請に応じる法律に従って振る舞え、正しくあれ、人々とくに貧しい人々の権利を尊重せよ、と教えたのです。

「私たちはどうすればよいのですか」と尋ねる兵卒には、「人を困らせたたり、偽りの訴えをするな。自分の給料で満足せよ」と答えました。(ルカ3・14参照) これは権力の乱用に対する明らかな警告であり、人を尊重せよ、人々の権利を侵害せず、人々に仕えよという要請です。イエズスの教えを先取りするヨハネの教えには、社会と階級、職業に関する基本的に前向きな姿勢が現れています。いずれを取りあげても、それらが正義と愛徳の実

本当の改革への望みは、キリストの福音を基礎とすべきです。福音の要求は愛のメッセージであり、正義を完成させるものだからです。すべての人は贖われ、高められ、栄光に召された者として尊厳を有します。人間の真の偉大さは、キリストにおいて具現化され、一人ひとりがキリストの光をうけて意味を持ち、尊い存在となります。この事実こそが、改革と再建の出発点なのです。

行に努力するかぎり、救いを得ることが出来るのだと教えているので、それにも拘わらず洗礼者は、手に箕を持ち、打ち場を清めるために来られ、斧を木の根におかれるキリストを人々に告げる様子でも分るよ、非常に厳しいだけでなく、荒しいといえるほどの態度を示しています。これは、人々の間の正義に基づく新しい関係について述べる率

直で力強い言葉です。レオ13世の社会教説は洗礼者ヨハネの以上の言葉を出発点とし、それを継承させたものです。その洗礼者について、福音史家聖ルカは「ヨハネはほかにも様々な勧めをして、福音を広めた」と書いています。(ルカ3・18) 現代の人々もまた、愛のメッセージである福音の要求に注目し、それが正義に手加減を加えるものではなく、かえって正義を完成するものであることを理解できるように、聖母マリアにお願ひしましょう。(12・9) 人間の尊さはキリストのうち啓示されている

ヨルダン川のほとりに立つヨハネは、イエズスこそ預言者がすでに告知知らせていた救い主である、と、人々に教えます。そしてイエズスの聖務への道を開き、いずれイエズスが授ける「聖霊と火」(ルカ3・16)による新しい洗礼について話します。まことにキリストは(父と子と聖霊の)三位一体の秘義の生きる姿としてこの世においてになりました。真理であり愛そのものであらせられる(存在)の永遠の現実として、また創造によって世に開かれ、贖いによって人類に伝えられた秘義の生きる姿としての御自分を示されたのです。同時にイエズスは(…)贖われ、高められた人間の、つまり人間の本当の偉大さの生きる姿です。老いも若きも、才能ある人もない人も、貧しい人も富んだ人も、他人を雇う人も他人に雇われる人も、イエズス・

キリストのうちに、栄光に輝く超越的な目的地へと召されている人間の尊厳の完全な根拠を再び見つけることができます。

これこそレオ13世が回勅『レールム・ノヴァルム』の中で労働者にとって必要だと主張された尊厳なのです。勤労者は自らを律することもできぬ知性の働きのない存在であるかのように考えられたり、社会的な支配や抑圧の対象にされたりしてはならない。労働者は社会と国家の援助を受けて現在と将来の必

要を満たし、安定した生活をする権利がある。教皇はこう強調されます。そこでレオ13世は、所有者と雇用者にその義務について思い起すよう忠告されました。その義務の最初のもは労働者のうちに人間のペルソナ(人格)としての尊厳を認めるべきであって、決して彼らを奴隷のように扱ってはならぬということです。「人間を金もうけの単なる手段として使用し、人間の価値を腕力によって定めることは(…)人の道にもとる」ことになるからです。

すべての人に認められるべきこの尊厳について、レオ13世が現代の社会関係に適用されたのに倣い、私は以後数回にわたり考えるつもりです。ここで私はこのテーマを扱う時のインスピレーションと材料を歴史上の決定的な出来事からとると、特に強調しておきます。その歴史的な出来事は、みことばの受肉です。御言葉そのものと私たちの間の御生活によって、人と人との関係はどれをとっても、善と愛と真理の姿であるキリストの光を受ければ明らかにな

るとお教えになった御方の来臨のことです。そのキリストは、「神の栄光の輝き、神の本性の型、その勢力あるみことばによって宇宙を保つ御方」(ヘブライ1・3)です。これが人間の本当の姿を示すキリスト教の啓示です。一人ひとりの人はキリストの光を受けて意味を持ちます。この人間の尊厳という価値こそ、アダムとエヴァの重い遺産を背負う人間の内的外的なドラマを解決する端緒であり、個人的社会的な絶えざる再建を実現するた

めの手掛かりなのです。みなさん、いとも聖なるマリアのうちにこのような再建の到着点を見つけることができます。新しいエヴァであるマリアのうちに、最後の日の完成を目指して歴史のうちに発展する神の御計画は、新しいエヴァであるマリアの中で、その美しさを余すところなく見せています。私たちを鼓舞してやまぬこの事業に責任をもって協力できるよう、聖母に助けを願いましょう。(90・12・16)

【四旬節】 祈りと秘跡……改心の原動力

「みことばはあなたに近く、あなたの口に、あなたの心にある」、これが私たちの告げる信仰のことばである。(ローマ10・8)

四旬節は信仰のことばが私たちの口に、私たちの心にある時期。この時期の典礼が示す神の言葉は、この聖なる時に神の民の自覚を促すために秘義の奥へと導きます。

典礼の中の神の言葉を黙想し、霊的に刷新されるよう、聖霊に願います。

教会は、四旬節第一主日に、ナザレトのイエズスが救いの使命をお始めになった様子を伝える福音を朗読します。

ヨルダン川に來られたイエズス。そこでは、ヨハネが罪のゆるしのた

めの悔い改めの洗礼を宣教してしました。(ルカ3・3参照) ヨハネが押しとどめたにも拘わらず、イエズスは洗礼を受けられました。ヨルダン川のほとりで預言者が、「世の罪を取り除く方」と言っていた御方イエズスは、罪人の中に入られました。(ヨハネ1・29参照) 荒野での四十日間の三度にわたる誘惑の場面を黙想する時、世の罪を取り除く御方であるイエズスが、創造の歴史における罪の唱道者に向い合っておられる姿が目に見えます。福音史家ルカが「悪魔」と呼び、また別の箇所「嘘の父」(ヨハネ8・44)、人殺し(同上)とも呼ばれている悪魔に立ち向われた後、キリストは人間の罪と「世の罪」の歴史に対

抗し、救いの使命をお始めになったのです。その道は十字架を通じて勝利へと続いていました。 罪へのいざない

キリストが三度の誘惑を退けたことは、いかなる誘惑にも私たち全員が立ち向わなければならないことを示しています。誘惑は「罪への誘因」、つまり肉の欲、目の欲、生活のおごりによって起ります。(ヨハネ12・16参照) ですから罪と戦う時、自分の中にあるその根源をたたかなければなりません。私たちの中にある「罪への誘因」はあらゆる誘惑の隠れた盟友のようなものです。そしてまた「嘘の父」である悪魔の盟友でもあるのです。キリストは直接悪魔に向かって言われました。「あなたの神なる主を試みるな」(ルカ4・12) また「あなたの神なる主を礼拝し、ただ神にだけ仕えねばならぬ」(ルカ4・8)と。悪魔は被造物である人間が、創造

主である神に仕えないことを何よりも望んでいます。悪魔は、人間が神に帰すべきもの、唯一神から発し神に支えられているものを奪い取ることを望んでいるのです。 「天人(神)のようになる」(創世3・5)、自分自身が神のようになる。 5) のためキリストは、救い主の使命の始めにこの三度の誘惑をお許しになり、死に至るまで従順を全うして世の罪を取り除くために來られた御方として、罪の根源を示されたのです。 教会はこの出来事を四旬節の教えの最初に位置づけていますが、私たち自身も罪への誘因の根源を見つめなければなりません。社会的な罪に関しても、表面的な解決だけでは十分ではありません。その根源にまで至らなければなりません。「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出るすべてのことばによって生きる。」(マテオ4・4)

罪と、罪との戦いの重大さを強調することで、教会はこの

四十日の間に私たちを超越しの秘義に導きます。 今日の典礼の第一朗読で読まれたエジプトでの奴隷状態からのイスラエルの脱出が、その道の始まりであり、前表でした。 契約の神は解放と救いの神です。御自分の摂理、父としての心づかいを人類に示される神です。これがはつきりと表されているのは、「いと高き者の守りのもとに住み、全能なる者のかけに宿る者」という言葉ではじまる詩篇90(91)でしょう。 (エジプトの奴隷から解放されたのち初めて祝った超越しを思い出させる) 脱出の書のように、この詩篇は四旬節の第一週の間、しばしば私たちの伴侶となります。 「私に頼ったから私は彼を救おう。私の名を知っているから、私は彼を高めよう。 私にこい願えば彼に答えよう。彼の苦難の時、私はともにいよう。」 (詩篇90(91)・14・15) (90・2・12)

説教・講話・書簡等の抄訳

創造の朝の

輝きに入る

「罪」シリーズ 最終回

1 創世の書第三章に含まれている、人間の罪に対する主なる神の応答を読むと、そもその初めから神は限りなく慈しむ方であり、同時に限りなく慈しむ深い方として理解することができよう。神は「御独り子を与えたもうほどこの世を愛された」(ヨハネ3・16)方として、「み子を私たちの罪のあがないのために遣わされた」(ヨハネ①4・10)方として、「ご自分のみ子を惜しまずに私たちにすべてのために渡された」(ローマ8・32)方として、まさにこの最初の宣言から明らかにされています。

2 注意しなければならないのは、創世の書3・15「私は敵意を置く」という言葉の中で「おまえと女との間」とまず最初に女がその場にすえられたということです。「おまえと男との間」ではなく、「女との間」であることがはっきりしている。初期の頃から解釈してきた人は、ここに重要な対照があることを強調しています。創世の書3・4によれば、サタン——昔の蛇——は最初に女に話しかけ、女を通して勝利を得ました。時が来て、神なる主は贖い主を告げるに当って、女を闇の王の最初の「敵」とされました。ある意味で女は、悪の権力が御子(女のすえ)である救世主に征服されるという明確な契約の、最初に恩寵を受ける者になるのです。

3 契約の歴史の中では、神がまず男(ノア、アブラハム、モーゼ)に語りかけられたことを記憶しているならば、このことは——重ねて申し上げます——きわめて意味深いことがらです。この場合には女の方が優位を占めているようにみえますが、キリストが女のすえであることを考えれば当然なことでは。実際の教会の多くの教父や博士たちは(原福音)で告げられた女の中に、キリストの御母マリアを見ています。聖母マリアはキリストによって勝ちとられた罪に対する勝利を最初に共有した人です。聖伝と共にトリエントの公会議で強調されたように(Dz 1516参照)聖母は実際に、原罪も他の全ての罪も免れています。そして特に原罪に関しては、ピオ9世が無原罪の御宿りの秘義(Dz 2803参照)を表明し、厳粛に定義しました。

4 この教義について公会議は、みごとに統合しています。救世主の到来を待つ昔ながらの信仰と希望と光を發展させてきたこの罪に関するカテケジスを、最もよく裏づけるものとして役立つテキストをここに引用するにとどめましょう。「あわれみの父は、女が死への役割を持ったと同様に女が生命への役割をもつようにと、母として予定された婦人の承諾が受肉に先立つことを望まれた。このことは、すべてを一新する生命そのものを世に与え、これほどの任務にふさわしいたまたまのを神からいただいたイエズスの母に、最も卓越した意味ではまるごとである。したがって聖なる教父の間で、神の母があたかも聖霊によってつくられ、新しい被造物に形成された者として、全く聖なる者、あらゆる罪の汚れを免れた者と呼ぶ習慣が広まったのも、少しも不思議ではない。ご自分の御やどりの最初の瞬間から全く特別な聖性の輝きをも

「かなりの数の教父たち」がその説教の中で、キリストの母マリアを新しいエバとして示している(それはちょうど聖パウロによってキリストが新しいアダムとして示されたように)と第二バテikan公会議は述べています。(『教会憲章』56) マリアは新しいエバとなりましたが、(生きざるすべての人々の母(創世3・20))でありながらアダムと共に全世界の罪への墮落の原因となったエバとは反対に、マリアはその従順によってキリストの贖罪に協力し、救いの原因)となりました。(Irenaeus, Adv. Haereses, II, 22, 4 参照)

って飾られたナザレトの処女は、神の命によって告げる天使から「恩恵満ちみてる者」というあいさつを受け、みずからは天の使いに「わたしは主のはしたためです、おことばのとおりになりますように」と答えた。こうしてアダムの娘であるマリアは神のことばに同意してイエズスの母となり、心から、いかなる罪にもひきとめられることなしに、神の救済のみ旨を受諾し、子のもとで子とともに、全能の神の恩恵によって、あがないの秘義に仕えるために、自分の主のはしためとして子とその働きに完全にささげられたのである。」(『教会憲章』56)

聖職者と修道者の かけがえのない役割



マルタの司祭の皆さんに聖ペトロの言葉「あなたたちにゆだねられている神の群れを牧せよ。そうすれば牧者のかしらが見れるとき、あなたたちは不朽の光栄の冠を受けるであろう」(ペトロ①5・2、4)を託します。聖なる司牧の使命に共に与るようにとキリスト御自身が皆さん一人ひとりを召出され、御自分の民を任せられた、これ以上の誉れがあるでしょうか。キリストと共に仕え、キリストと共に働き、キリストと共に苦しむ、これ以上の励みがあるでしょうか。そうすることで、忠実な信者全てと共に、やがて来る栄光に与ることができるようになります。そう、兄弟の皆さん、牧者の頭キリストが皆さんを司祭に召出されたのは、この司牧の使命と栄光のためなのです。皆さんが、人々のすぐそばで聖務に携わっておられることは何という恵みでしょうか。「仕えられるためではなく仕えるために」来られた(マテオ20・28)キリストに倣って、人々の中で働き、生きていく皆さん、司祭としての豊かな情愛を培い、それを広めていくよう絶えず努めてください。人々を永遠の善の極みまで、つまり、キリストが御父の右に座しておられる(コロサイ3・1)至上の所にまで導いてください。全ての人が敬いと親愛の情をもち、人々がいつも近づけるような人になってください。「主イエズス・キリストへの信仰において人に差別をつけるな」(ヤコボ2・1) 社会的、経済的地位にかかわらず、皆さんのドアを叩く者は誰でも、皆さんの言葉や行いの中に、神が愛と理解をもって与えられた真理を読み取ることができねばなりません。神の福音を広めるために、人々の中から特別に選ばれた(ヘブライ5・1参照) 皆さんは、

不変の教え

キリストが周囲の人全てに示されたのと同じ「あわれみ」を人々に示す(マテオ9・36)責任があります。

司祭としての使命が、もっぱら個人的な事柄に終始するべきでないのはご存じの通りです。司祭団は、キリストの一つの体である(コリント①12・12)教会の本質そのものの交わり(一致)をはっきり反映しなければなりません。「司祭の職務と生活に関する教令」は、「司祭団の各構成員は使徒的愛と職務と兄弟的交わりとの特別なきずきによって他の構成員たちと結ばれている」「秘跡的兄弟愛」について述べています。(8番)私たちが説く愛の掟を、兄弟である司祭の間で実行されないようなことのないよう、まず愛徳が要求されま

す。次いで司祭が、聖務を果すに当り、霊的に孤立しないよう祈りのきずきが必要で、さらに、各種の協力が要求されますが、これについては同教令の7番に記載されています。「司祭も孤立して個別のままでは自分の使命をじゅうぶんに果たすことはできないのであって、教会の長上たちの指導のもとに他の司祭たちと一致協力しなければならぬ」(7)私は皆さんに何よりも一致と調和を示すお手本になっていただきたい。そうすれば、皆さんに委ねられている人たちはみな感化されて平安に暮らすことができ、一つの家族の一員として一体となって仕事に励むことができるでしょう。

皆さんの奉献こそ、人間がキリストにおいて新たな創造に、つまり「肉ではなく霊のうちに」(ローマ8・9)生きる新しく生れ変わった人間として召されていることの一しるしです。神の国に入るため、喜んで清貧、貞潔、従順を受け入れることは、神の御子がこの世に遣わされた時に選ばれた生き方の証人となることなのです。修道者の奉献を可能にするには、今日、信仰が要求されます。「希望するものの保証であり、見えないものの証拠である」(ヘブライ11・1)信仰が必要なのです。近代的生活のおかげで、人々は神の存在を忘れやすくなり、数々の快楽の対象を作り、物欲や権力の行使に走っています。そのどれをとっても、永遠の幸せをもたらすものではなく、人生の真の意義を教えてくれるものでもないというのです。福音的勧告の実践を誓った皆さんは、不滅なるもの(コリント①50・53参照)を証明してください。皆さんは、神のために命を失う(マテオ17・25参照)ことによって、今、そして来たる世で豊かな命を見つかることを世界に示してください。人間の超越的召命を自ら表現しておられるのです。その使命は、キリストと共に十字架の道を歩むことによってのみ達せられます。これは生涯の仕事です。「天の父が完全であるようにあなたたちも完全な者になれ」(マテオ5・48)の言葉に倣うなら、キリストと共に死んで復活し、復活しては死に、を絶え間なく繰り返さなければなりません。十字架の道を歩きながら、うんざりしたり、がっかりしたりしないでく

ださい。神は約束を守る御方であることを忘れないでください。皆さんを修道生活に召出された神は、皆さんがくじけず、やりとおすのに必要な全てのものをくださいます。(…)

観想修道者の皆さん

観想生活に召出された皆さんに、特にこの言葉を贈りたく思います。

皆さんがよくご存じのように、元来聖ベネディクトの規則に由来し、また絶えずそれに当てはめられているメッセージは、観想の経験を最大限重視していますが、聖ベルナルドにあっては、それが具体的かつ実践的な活動と緊密に結びついています。聖ベルナルドにとっての神の観想は、単に哲学的な思索だけでなく福音の教えに従い、靈魂の花婿・教会の花婿であるキリストとの親密な一致を示すものです。

観想修道者へ

ベルナルドにとつて観想が優れているのを強調することは、神との友情を増すために、あらゆる関心や活動を従属させることなのです。同じ霊的な経験へと人々を導くために、兄弟的な愛の実行へと向うのです。

しかし、隣人を愛するのは、兄弟姉妹たちに、以前にも現代にも経験されている神のやさしさ、すなわち神のすばらしい御業、恩寵、真理、賜を言葉と行いによって知らせるためです。私は、聖ベルナルドが活動における観想者であることを強調し

皆さんの絶え間ない祈りと犠牲は、教会が示す愛の真髄です。目には見えなくても心は絶えず鼓動を続け、罪人を贖い、義人を聖化し、福音を広めていきます。私たちの考え方は異なるところがあっても、神の示された道を踏みはずさず、世俗の事柄から身を引くことによって、皆さんの影響力は弱まるどころか益々強まり、全人類に無限の祝福を与える

たいと思います。クレルボーの聖人において活動と観想のこの親密な一致は、活動が単に知的な働きではなく神を愛する道であるという事実からきています。それゆえ、活動は単なる実践ではなく、私たちが愛し仕える兄弟姉妹に現存する神の姿を観想することでもあるのです。

彼は一度ならず社会と教会の深刻な問題解決のため、修道院を離れざるを得なかったのですが、その教えと模範から、修道者はどんな種類の活動を隣人に代わって成しとげよう求められているか、明らかです。皆さんの手仕事の伝統は、社会的物質的幸福に貢献し、正義の原理に基づく経済・社会秩序への証言となり、また、まっとうな生活を保証するだけでなく、靈魂の救いのために成しとげる仕事そのものなのです。

しかし聖ベルナルドが教えるよう

源となります。目に見えない使徒職の豊かな実りは、皆さんが実際に行う奉献によって、キリストの神秘体に伝わります。皆さんの静かな修道生活は、苦勞が無駄にならないように(『教会憲章』46)、その土台を主に置くべき「地上の国」に深い影響を及ぼします。観想生活への召出しを沢山送ってくださいますように。(90・5・25)

に、皆さんに固有の使徒職の最も個人的な特長は、償いの行為を通じて自らを密かに捧げること、修道規則の遵守、特に、聖務日課やミサでの祈りと犠牲の奉献です。これは「神の仕事」だけの問題ではなく、「隣人の仕事」でもあります。観想を通して受けた照らしは、聖ベルナルドが教えるように、時として大変高度なものなので、人に伝えることができませぬ。しかし、それは兄弟姉妹の善のため、神に奉献されるのです。(説教62・3参照)

修道者の内的生活は、それ自体貴く賞賛に値するものですが、霊性の個人的実践にはありません。それは、修道者が神の民の全メンバーと全ての人類の善のために成しとげる教会の使命であり、奉仕なのです。修道者の場合、人類の救いのために黙想し、観想し、祈り、自らを奉献するのは教会そのものです。聖ベルナルドによれば、消化器官が体全体のためであるのと同様、聖務日課と観想を通して、修道者は神の御言葉の霊的な滋養物と秘跡の恩寵を吸収し、それらを教会の全メンバーのため

の栄養に変えるのです。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしに
そのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部八十円 送料実費
■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替 神戸 3-72393